

「ドーパミン中毒療養記」

—二稿—

2026/2/9

〈人物表〉

石川 義弘 (32)

しがない独身男性

1. 義弘のマンション・寝室（朝）

こぢんまりとした六畳の部屋にシングルベッドとPCデスク。寝室兼、仕事部屋。
スマホのアラーム。石川義弘（32）、手だけでスマホを探し、アラームを止める。

2. 義弘のマンション・洗面台（朝）

スマホ片手に歯磨き中。無精髭が生え放題。

画面には青春部活もののドラマ。熱血教師と生徒ら、野球グラウンドで会話していて、

画面の生徒A「俺が野球部を全国に連れて行って見せます」

画面の教師「まだ、愛好会なのか？」

義弘、無表情で観ている。

歯磨きを済ませ、体重計に乗る。目盛りを見て、苦い顔で腹をつまむ。

3. 義弘のマンション・寝室（朝）

ノートPCで画面の「出勤」ボタンを押下するや否や、ベッドに入り、横になってスマホを開く。

画面には、ドラマの続き。

画面の生徒A「顧問さえいれば、部になれるのに……」

画面の教師「なら、俺がやる」

生徒たちのざわめく声。

と、スマホに社内チャットの通知。

開くと「西川『ごめん、このシート関数どっか壊れてない？ 石川さん確認してもらえる？』」の文字。すぐさま「すみません、今タスク詰まっております。。。」

柳さんお願いできますでしょうか？? **nan**」と送る。すぐさま柳から「了解」のスタンプが押される。

と、スマホに着信。軽く咳払いして取り、

義弘 「はい。はい、お世話になっております。ええ、ええ。はい、引き続き社内で検討中でございます。ええ……」
ポリポリと目ヤニを掻く。

義弘 「ええ、まとめ次第またご連絡いたしますので、ええ。」

申し訳ありません。はい。はい、失礼します」

義弘、ドラマに戻って、

画面の生徒B「先生、野球やったことあんのかよ？」

画面の生徒C「流石にルールくらい知らねえと……」

カキーンという甲高い金属音。柵越えに驚く生徒ら。

4. 義弘のマンション・寝室（昼）

ふて寝していた義弘、ハッと目覚める。

慌てて社内チャットを開き、通知を確認。

柳の「直しておきました」の一件のみ。安堵。

腹の鳴る音。時刻は十二時過ぎ。

5. 中華料理屋（昼）

よくある町中華。盛況な入り。

義弘、カウンターでチャーハンを食べている。

手元のスマホ画面。女子高生が踊っている縦動画。

女性店員の声「昨日言ったこと、覚えてる？」

若い男女の店員、並んで皿洗い。微妙な緊張感。

男性店員「……うん」

女性店員「……本気？」

男性店員「……うん」

二人、皿を洗う手を止めて目配せ。

客ら、事態に気づいて静かに聞き耳を立てる。

皆、レンジからそーっとスープ飲んだり麺を啜る手

を止めたり、新聞紙からひよっこり顔を覗かせたり。

義弘だけ、勢いよくチャーハンをかき込む。

女性店員「なら、もう一回言って」

男性店員「え？ 今？」

女性店員「今ここで、もう一回……」

男性店員、唾を飲み込む。

続いて、客も飲み込む。

二人、向き合う。客の視線が集まる。

義弘、スマホをスクロール。別の女子高生。

男性店員「俺さ……」

女性店員「……うん」

男性店員「やっぱり、お前のこと……」

義弘、バツと立ち上がり、イヤホンを片耳外して、

義弘「ご馳走様でしたー」

と、厨房に向かって伝票を差し出す。

男性店員、義弘を二度見。客らも二度見。

義弘、一瞬キョトンするも、分ならず。

イヤホンからうっすら漏れる流行りの音楽。

男性店員「あ、っはーい……」

と、手を拭ってレジへと駆ける。

客ら、肩を落とす。

女性店員、目を落とす。

6. 商店街の通り（昼）

男性店員の声「ありがとうございましたー」

と、義弘、中華料理屋の暖簾をくぐり出る。

イヤホンを付け、スマホで先ほどのドラマを見る。

画面の生徒A「先生、現役時代は黒豹って呼ばれてたらしい」

ざわめく画面の生徒ら。

義弘、ドラマをじっと見たまま、歩きスマホで商店

街を進んでいく。

隣の牛丼屋店員「クーポンです」

と、義弘にクーポン差し出すが、取り合わない。

クリップボードを持った人「アンケートご協力お願いします」

おばあさん「お兄さん道を教えて欲しいんだけど……」

と、次々立ちはだかるが、義弘、さっとかかわす。

店主の声「食い逃げだ。捕まえてくれ」

と、叫ぶ飲食店の店主。義弘の横を食い逃げが追

抜いていくが、義弘はスマホに釘付け。

前方から、蕎麦のせいろを山のように重ねた出前の

自転車、やって来て、

蕎麦屋の出前「馬鹿野郎、気イ付けろい」

と、出会い頭に転んでしまい、ぶちまける。

義弘、気付かず、ボケっとスマホを見て進む。

画面の教師「事件は部室で起こってるんじゃない」

画面の教師、片手には金属バット。

義弘、ドラマを見て笑う。

商店街のおばさん「えー、本物？ サインしてー」

俳優 「ごめん今プライベートだからさ」

と、商店街を歩く、教師役の俳優。

小さな人だけりができている。

画面の教師「グラウンドで起こってるんだっ」

義弘、気付かず、器用にかわして通り過ぎていく。

路肩に停められた黒いボックスカー。

商店街のおじさん「(義弘に) ちょっとその君、助けてー」

と、黒づくめの集団に車に押し込まれているおじさ

ん、必死に叫ぶも義弘、スマホを見ている。

画面では、教師と生徒らがユニフォーム姿でレイン

ブーツリッジを駆けている。義弘、静かに爆笑。

7.

義弘のマンション・寝室(昼)

デスクに置かれたマグカップのコーヒー。

西川の声「えっと、とりあえずじゃあ今日はそんなところかな」

WEB会議中。カメラはオフ。義弘、リクライニン

グしながら、ボケっと天井を仰いでいる。

西川の声「石川さんさ、この件リストアップするのってすぐでき

たりする？ できれば今日中お願いしたいなーなんて」

義弘、腰を上げて、マイクをオン。

義弘 「あーはい。ちよつと今、他部署の頼まれごとやってて立

て込んではいらんすけど」

西川の声「あー、そうなんだ」

義弘 「あ、でもはい。やってみます」

西川の声「ありがと助かるわ。ごめん、次あるから一旦お疲れー」

と、会議が切られる。

PC画面のマウスカーソル。静止している。

義弘、一息を吐いて、大きなあくび。

慣れた手つきでPCマウスを何やら円盤上の機器の

上に置くと、マウスカーソル、微細に振動し始める。

義弘、爆睡している。アラームが鳴る。手だけでスマホを探し、アラームを止める。

暗い中PCに向かい、社内チャットを開く。西川に「すみません、やっぱり出来ませんでした涙」と、柳に「こちらもご対応お願いできませんでしょうか？.mm」と送る。柳からすぐ「了解」のスタンプ。と、スマホに着信。迷った末、出る。

義弘 「大丈夫。いや、家。テレワーク。この前言ったってば」

母の声 「年末どうすんのってお父さんが」

義弘 「多分、帰ると思う。また連絡する」

母の声 「分かった。ごめんね仕事中に」

義弘 「いや、大丈夫」

母の声 「うん。頑張ってるね」

義弘 「うん。うん。じゃあね」

「退勤」ボタンを押下し、パタンとPCを閉じる。真っ暗な部屋にカーテンの隙間から夕日だけが差し込む。義弘、鼻で深呼吸。

ふとスマホを開き、ドラマの続きを見出す。

画面の教師 「何してんだよ」

と、試合後、夕暮れのベンチで叫んでいる。

画面の教師 「お前さ、それで本気かよ。お前の人生、そんなんでいいのかよ。そんなことするために生まれてきたのかよ」

生徒ら、反抗的な目つき。

教師、一人の胸ぐらを掴み、

画面の教師 「ダメだろ。なんで本気で頑張らねんだよ。今頑張ったらよお、一生頑張れるかも知んねえだろっ」

義弘、じっと見ている。

画面の生徒A 「何が分かるってんだよ……」

画面の教師 「そんなテキストなことするための人生じゃねえだろ
うがよお。必死で生きろよ。全力で生きろっ」

義弘の目には、ツーンと流れる一筋の涙。

9. ジム・外観（夜）

よくある二十四時間ジム。

10. ジム・内（夜）

ランニングマシンで汗をかく人々。

その奥、ウエイトコーナーにはジャージ姿の義弘。

義弘 「んっ」

と、今にも沸騰しそうな顔。

重そうなバーベルをスクワットで持ち上げている。

義弘 「んあっ」

険しい表情のまま、一回、二回、三回と続ける。滝

のような汗が額からドバドバと流れ落ちていく。

義弘 「んあああっ」

と、さらに持ち上げる。限界の表情。

義弘 「んあああああああっ」

と、最後一回持ち上げ切ると、力を振り絞ってバー

ベルをラックに戻す。

義弘 「はあー、ふああー……」

床に大の字にへたり込んで、肩で息を整える。

どこかやり切った表情。ゆっくりと、息を整える。

11. ジム・入り口（夜）

スタスタとジム内を歩く義弘。

ふと両手を見ると、手のひらには赤いマメ。

義弘、心地良さそうにギュッと握り締める。

外に出ようと、ジムの入り口ドアに手を掛ける。

と、券売機の前で困ってる若い女性客に目が止まる。

出ようか迷った末、

義弘 「あー、それ。先にスマホで会員証タッチしないと」

女性客 「え？」

と、振り返るが、分かっていない。

義弘、仕方なしにやってみせようと、ポケットを探

るが何も入っていない。気づいて、

義弘 「……ロッカーか」

女性客「え？」

義弘 「……あ、じゃあ、いいですか？」

と、女性のスマホを預かって、代わりにタッチして
見せる。

女性客「あー、なるほど。ありがとうございます」

と、大袈裟なまでのお礼と、屈託のない笑顔。

義弘 「とんでもないです」

と、一瞬気後れするが、誤魔化してまんざらでもな
い笑み。

12. 義弘のマンション・浴室（夜）

義弘、鼻歌混じりで勢いよくシャワーを浴びている。
どこか満足げな表情でシャンプーをしている。

13. 義弘のマンション・洗面台（夜）

風呂上がり、洗面台で化粧水を塗りたくっている。
ふと、先ほどの笑みを思い出し、顔に浮かべる。
が、無精髭が気になって顎を撫でる。
シェーバーを手に取る。

14. 義弘のマンション・寝室（夜）

ドラマの動画アプリを開こうとするが、指が止まる。
あくび。
スマホを枕元に置いて、眠りにつく。

15. 義弘のマンション・寝室（朝）

アラームの音。手だけでスマホを探し、アラームを
止める。

（おわり）